

『思いや意図を持って音楽活動を楽しむ子を育てる』授業

「音が重なるときれいだね。」「友達と声を合わせると楽しいね。」というつぶやきが聞こえてきます。題材『旋律の重なりを感じ取ろう』では、子どもがお互いの声を聴きながら歌い合い、「こう歌おう。」と思いを伝え合ったり、目と目を合わせながら声を合わせたりする姿が見られます。

音楽の授業では、子ども一人一人の音や音楽の感じ方、思いや表現の意図を大切にします。そして、子どもが楽しく音楽と関わり、自らの感性を働かせながら、音楽のよさや美しさを求めていく授業づくりをしていきます。

■ ポイント 1

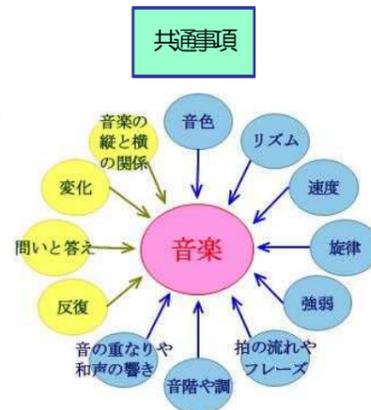
歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞を通して題材目標に迫る

音楽の授業づくりは、題材を構想することから始まります。まず目標を達成するために題材を設定し、多様な音楽活動から目標に迫るために教材を選択し、配列を工夫します。歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったり、聴いたりといった様々な音楽の直接体験を積み重ねることによって、子どもは音や音楽の広がりや深まりを感じるとともに、題材目標に向かって思いや意図を持って取り組むことができるようになります。

■ ポイント 2

【共通事項】を支えとして、系統的な学びを積み重ねる

【共通事項】を支えとして、小中学校9年間を通して、繰り返し、系統的に学びを積み重ねます。一つの楽曲には旋律、反復など、音楽を形づくっている要素が数多く含まれています。その中から、本題材で支えとなる要素を絞り込むことが大切です。子どもは、その要素を視点として音楽を聴き取り、そこから感じ取ったことを基に思いや意図を持ち、音楽を追究していきます。そして、次の教材に出会った時も、これらの力を使って、表現や鑑賞の学習に取り組んでいくようになります。



■ ポイント 3

音や音楽、言語を通して、思いや意図を仲間と共有する

音楽を形づくっている要素を表す用語と、自らの音楽経験が結び付いたとき、子どもは、生きて働く音楽の言葉を獲得していきます。そして、獲得した音楽の言葉を用いて友達と思いを共有することにより、仲間とともに音楽をつくり上げる喜びを感じるようになります。そのため、授業では、互いの音や音楽を「聴く」ということを大切にするとともに、聴いて感じ取ったことを仲間と交流して話し合わせたり、交流後にまた聴かせたりするなど、音や音楽と言語のつながりを意識させましょう。

■ 実践事例 (小学校4年生)

題材名 旋律の重なりを感じ取ろう

教材名 「もみじ」

本時の目標 (6/7時)

旋律の重なりを聴き取り、面白さや美しさを感じ取りながら、その面白さや美しさを表現するために、音色や旋律の重なりをどのように工夫するか思いや意図を持つ。

(A表現 (1) 歌唱エ 音楽表現の創意工夫)

【共通事項】音色 (声が重なり合う響き)、旋律 (旋律の動き)

学習過程 音の重なり (主旋律と副次的な旋律の重なり)

主な学習活動

○もみじは、どのような旋律の重なり方になっていたかな。確認しよう。(拡大楽譜提示)

- ・2つのパートが追いかけてこして旋律が重なっていたね。
- ・「数ある中に」は、リズムが違う追いかけてこだったね。
- ・「松を彩る」から、旋律の動きが一緒になっていたよ。

○追いかけてこの部分を二部合唱で歌ってみよう。

- ・きれいな追いかけてこになってないな。
- ・「数ある中に」が合わないな。

追いかけてこの旋律(1~8小節)を、きれいに重ねるためには、どのように歌えばよいらう。(グループ練習)

【音色】

- ・「怒鳴るような大きな声だよ。」「もっと2つが溶け合うように柔らかく歌おうよ。」「濃い色の葉も薄い色の葉も、仲良く照らされているようにしたいね。」「溶け合うように同じ音色で歌うと、きれいな響きになるね。」
- ・「追いかけてこのところを、呼び掛けたら答えるように歌おう。」「歌い出しのタイミングやお互いの音をよく聴いて合わせよう。」

【旋律】

- ・「『数ある中に』が、きれいに重ならないね。」「下のパートの『も』を伸ばしていると終わりが合わないよ。」

【音の重なり】

- ・「主な旋律の方が、大きい声だね。」「どっちの旋律も同じ大きさがいいよ。歌ってみよう。」「同じ位になったか、聴いてもらおうよ。」

○代表グループに、旋律をきれいに重ねるためのポイントを発表してから歌ってもらおう。

○きれいな旋律にするために工夫したことをグループで歌って確認し、どのような歌い方にしたかワークシートに書こう。

追いかけてこして、音が重なっているところを、呼び掛けたら答えるように歌ったよ。Aさんをよく見たり音を聴いたりして、音のバトンパスをして歌ったよ。(個)

本時の目標に、子どもに聴き取らせたい「音楽を形づくっている要素」を位置付けます。

授業者は、「音楽を形づくっている要素」に関する指導内容を教材に合わせてより明確に、具体的に描きます。

○題材構想 (全7時間)

歌唱 (2時間)

「パレードホッホー」
二つの旋律の重なり

鑑賞 (1時間)

「ファランドール」
二つの旋律の重なり

器楽 (1時間)

「雨の公園」輪奏

歌唱 (3時間)

「もみじ」
二部合唱

まず、どのような旋律の重なり方になっているか確認し、学習活動に見通しを持たせます。

音や音楽と言語を行き来させることが大切です。

教師は、子どもの歌声に耳を傾け、表現しようとしていることを見取って価値付け、子どもの考えを明確にさせていきます。

ねらいに沿って、思考・判断したことを、言語活動等を通じて見取ります。

『音や音楽の美しさを知覚・感受し、豊かな情操を養う』授業

「すごい！弾き方を変えたら、音が華やかになったね。おもしろいね！」と、工夫したことが音に表われる嬉しさを感じている子どもの姿があります。

音楽科の授業では、自分なりに表現のイメージを持ち、音や音楽で表現するおもしろさや、自分なりに音楽の価値を感じ、音楽のよさを味わうことを大切にしたいです。そのためにも子どもにじっくり音楽を聴かせ、子ども自身が感じたことを基に、学習が展開されるようにしましょう。

ポイント 1

楽曲との感動ある出会いを大切に、題材を構想する

子ども一人一人が、音や音楽を価値あるものとして学んでいけるように、授業者として題材の魅力を捉え、題材を通して子どもにどのような力を身に付けさせたいかを明確にして構想しましょう。その際、歌唱・器楽・創作・鑑賞の多様な音楽活動から題材の目標に迫ることで、子どもの学びが深まります。また、子どもが「歌ってみたい！」「もっと聴いてみたい！」という思いを抱くような楽曲及び演奏との出会わせ方を工夫するなど、教師が意図的に働き掛けることができる教材を選択・配列し、題材を構想しましょう。

ポイント 2

【共通事項】を支えとして、表現や鑑賞の指導を充実する

【共通事項】に示されている「音楽を形づくっている要素」のうち、何を取り上げ、どのように扱うのか、教師が具体的に捉えておくことが大切です。そして、音や音楽から子どもが知覚したこと・感受したことを基に、表現領域では、思いや意図と表現が結び付くように、鑑賞領域では、楽曲の特徴や演奏のよさなどを考えて聴くことに結び付くように、教師が子どもに対して視点を示すなど手立てを講じましょう。このような【共通事項】を踏まえた教師の仕掛けや支援が、表現や鑑賞の指導の充実につながります。

ポイント 3

音楽文化について、関心や理解を深める

我が国の音楽や諸外国の音楽を素材とした表現や鑑賞の活動を通して、歴史的背景を持つ音楽の価値等を尊重する態度を育成します。そして、音楽の多様性を理解し、自らも音楽文化の担い手となることを意識させましょう。そのためにも、まずは伝統音楽の表現や鑑賞の活動を子どもに体験させましょう。和楽器を専門的に学んだ経験のない教師も、子どもとともに我が国の伝統音楽について幅広く学ぶことから始めましょう。

陥りやすい点

曲を仕上げることを目的とした楽曲完成型の授業になっていませんか？
音楽の授業は音や音楽を媒介としてコミュニケーションを図り、友達と学びを構築していくものです。自分の考えを伝え合い、友達の考えに共感したり、考えを共有したりできるように、子どもの協同的な学習を促進しましょう。

実践事例(中学校1年生)

題材名 日本の伝統音楽に親しもう
教材名 「さくらさくら」
本時の目標 (5/6時)

前奏部分の旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、奏法による音色、序破急、間を生かし、どのように表現するかについて思いや意図を持つ。

(A表現(2)器楽ア 音楽表現の創意工夫)

【共通事項】音色(箏の音色)、速度(序破急)、リズム(間)

学習過程

主な学習活動

○これまでに学習した、奏法や日本音楽の特徴は、どのようなものがあったか確認しよう。

・箏にはいろいろな奏法があって、弾き方で音が変わったね。
・曲が進むにつれて速くなる、「序破急」という速度の特徴もあったね。
・日本の音楽には、「間」というものもあったね。

○ペアで、「さくらさくら」の前奏部分を一度弾いてみよう。

箏の奏法や日本音楽の特徴を生かして前奏部分を表現するには、奏法(音色)や、リズム、速度の変化をどのようにしたらよいらう。

<p>【音色】</p> <p>「ここは、音がだんだん高くなっていくから、盛り上がっていく感じだよ。」 「トレモロで弾くのはどう？」 「音が華やかになるね。」 「トレモロありとなしで比べよう。」</p>	<p>【リズム】</p> <p>「こここここの4分音符は、2人ともリズムが一緒だよ。」 「ここを弾く時は、間をとって、2人で音を揃えよう。」 「2つ目の音を弾く時、合わないね。」</p>	<p>【速度】</p> <p>「速さが一定だね。」 「序破急をまねしてみようよ。」 「速くするタイミングが合わない。」 「ここから速くしてみよう。」 「だんだん合ってきた。」</p>
--	---	---

○代表グループに、創意工夫したポイントを発表して、弾いてもらおう。

○奏法(音色)やリズム、速度の変化を生かしてどのように表現にしたか書こう。

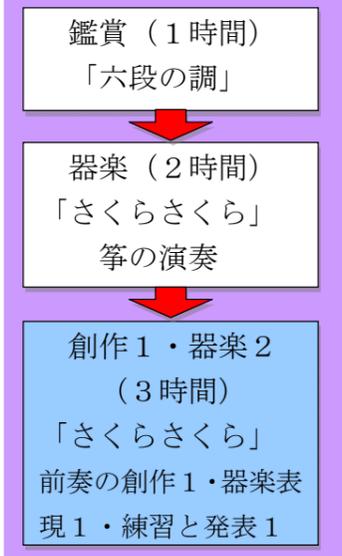


旋律がだんだん上がっていて、盛り上がっていく感じがしたので、そこをトレモロで弾きました。華やかな感じで表現ができました。

前時(4/6時)で創作をする際には、子どもが見通しを持って活動できるように、創作の手順や、音階・奏法・小節数等を提示します。

音楽を形づくっている要素に関する指導内容を、教材に合わせてより明確に、具体的にします。

○題材構想(全6時間)



教師は子どもの演奏を聴いて価値付けをし、表現意図を聞くことで子どもが表したい音や音楽を明確にさせていきます。

子どもは、自分たちの音や音楽を知覚・感受しながら、どう表現したらよいかを追究していきます。

ねらいに沿って、思考・判断したことを、言語活動等を通じて見取ります。